
地(知)の拠点整備事業 (大学COC事業)

地域と創る
“いわて協創人材育成＋地元定着”プロジェクト
～岩手大学開学記念行事～

平成26年5月

岩手大学

理事・副学長 丸山 仁

※発表資料とは、一部異なります

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

岩手県・盛岡市 地域の抱える課題

- ✓ 震災復興
- ✓ 人口の減少
- ✓ 少子高齢化・過疎化
- ✓ 産業振興
- ✓ 大学・短大への進学率
40% (全国46位)
- ✓ 財政力指数 0.3
(全国38位)
- ✓ 県民所得 223万円
81.9
(全国を100とした場合)
- ⋮

多種多様で複合的な課題

岩手の歴史・文化・特色を理解し、異分野の専門家と協働し、自らの専門性を地域の課題解決へ実践することができる人材の育成が必要

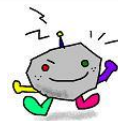
いわて協創人材の育成

実現に向けた協定を締結

人材が地元へ定着する必要

人材の受け皿も必要
→岩手の産業の振興・高度化の必要

岩手大学



「岩手の“大地”と“ひと”と共に」

<特色>

- ✓ 人文社会科学部、教育学部、工学部・農学部、約6,000人がワンキャンパスに集う総合大学
- ✓ INSに代表される産学官連携が大変活発
- ✓ 自治体との相互有効協力協定による人事交流
「共同研究員」
- ✓ 大学地域貢献度ランキング「全国公立私立大学中、第3位」(平成25年度日本経済新聞社調査)

<課題>

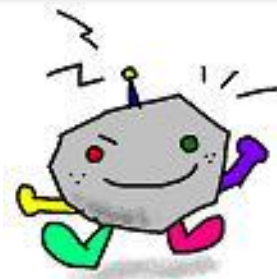
- ✓ 低い県内就職率 34%
- ✓ 地域を意識した教育プログラムの整備が不十分

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

岩手大学 「岩手の“大地”と“ひと”と共に」

<特色>

- ✓ 人文社会科学部、教育学部、工学部・農学部、約6,000人がワンキャンパスに集う総合大学
- ✓ 岩手ネットワークシステム（通称：INS）に代表される産学官連携が大変活発
- ✓ 自治体との相互有効協力協定による人事交流「共同研究員」
- ✓ 大学地域貢献度ランキング
「全国公立私立大学中、第3位」（平成25年度日本経済新聞社調査）



<課題>

- ✓ 低い県内就職率 34%（直近4年間平均）
- ✓ 地域を意識した教育プログラムの整備が不十分

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

地元・地域

いわて協創人材の育成

実現へ協定

人材が地元へ定着する必要

岩手大学

「岩手の“大地”と“ひと”と共に」

- ◆大学・自治体・企業等が協力してプロジェクトを実施
- ◆地元・地域を知る
- ◆グローバルな視点

教育

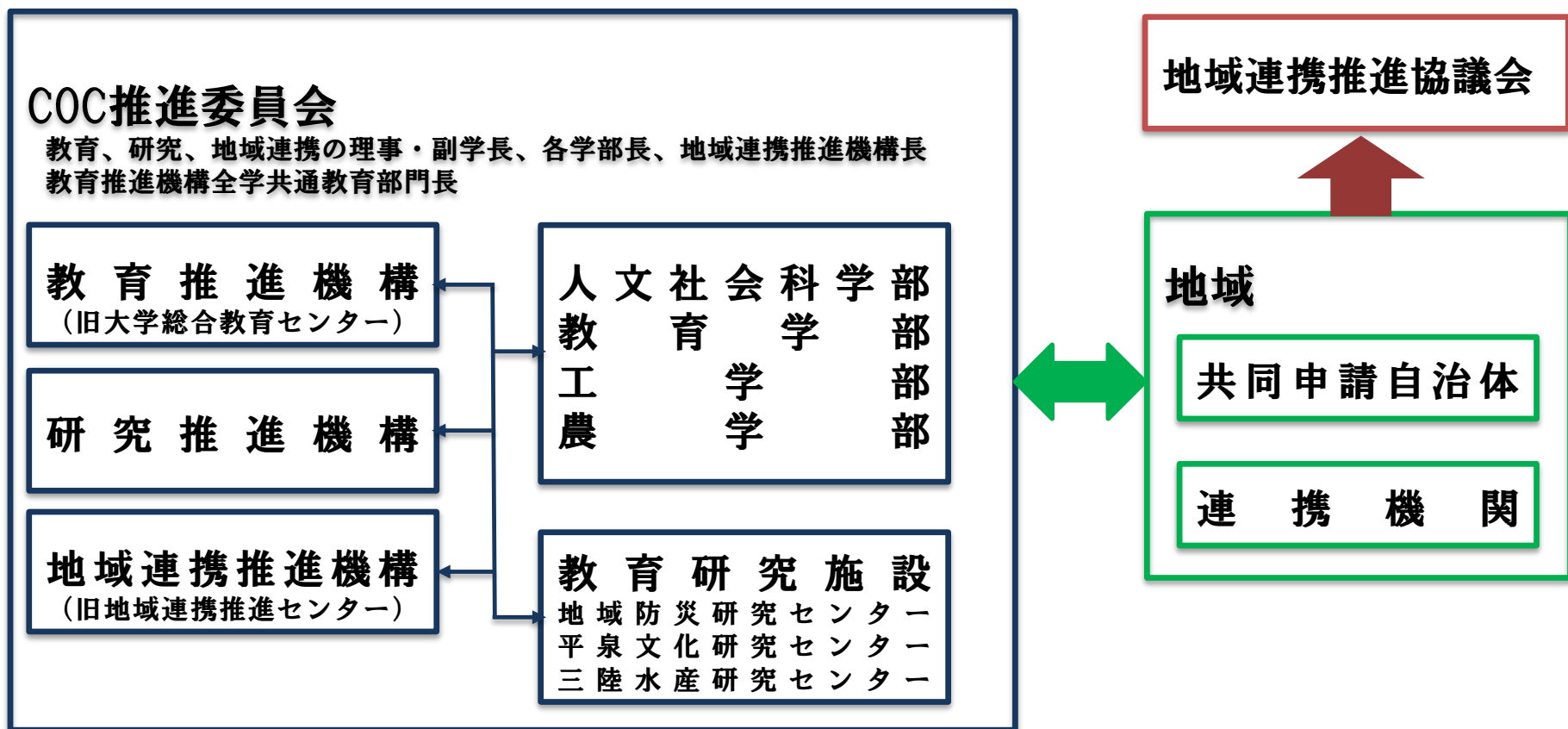
研究

社会貢献

復興

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

学内体制図



教育

研究

社会貢献

復興

【全学共通教育】

【全学部の専門教育】

【地域企業・自治体等への
インターンシップ促進】

【学生発案
独創的プロジェクトを
支援】

教育

研究

社会貢献

復興

【全学共通教育】

- 岩手の歴史・文化・特色を理解するための科目を充実
(いわて学/地場産業・企業論/復興学/ボランティア論/
地域防災学/宮沢賢治/石川啄木/平泉)
特に、**震災復興に関する学修（被災地学修）を
全学生必修化**
- 高年次で、**地域課題をテーマとしたPBL**
(Project/Problem Based Learning) 科目を開設
- 学部を越えてチームを組み課題解決にあたる
- 自治体・企業が講師・アドバイザーとして参画

PBL (Project/Problem Based Learning) とは

「課題解決型学習」

- ✓ チームの力によって課題を解決することにより、知識に加え、コミュニケーション能力や主体性、課題解決力などを育成する授業
- ✓ 地域企業・自治体等へのインターンシップの拡充により、地域を「新たな学びの場」とする実践的な「“地域創生型” PBL (Project Based Learning) 科目」の創設を目指す

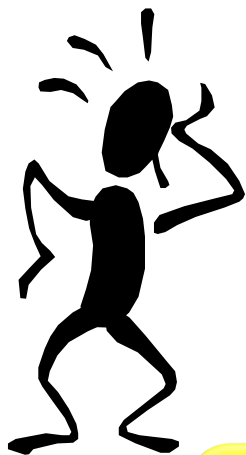
PBLのイメージ

地域の課題



- ✓ 問題の抽出
- ✓ 課題の認識
- ✓ 目標と基準
- ✓ フィールドワーク
- ✓ 研究、実験、調査
- ✓ 振り返り . . .

解決のヒント!



- ✓ コミュニケーション能力
- ✓ データマイニング能力
- ✓ 課題解決能力
- ✓ 新たな課題発見能力 . . .

- ✓ グローバルな視点
- ✓ 主体性
- ✓ 問題を解き続ける意思
- ✓ 専門性
- ✓ 交渉力 . . .

教育

研究

社会貢献

復興

【全学共通教育】

【全学部の専門教育】

【地域企業・自治体等への
インターンシップ促進】

【学生発案
独創的プロジェクトを
支援】

教育

研究

社会貢献

復興

【全学部の専門教育】

- 1年次全学生を対象として学部の専門と地域貢献の関連を学修（専門教育の動機付けにもする）
- 地域をフィールドに、専門教育を実施
- 卒論テーマの一部として地域課題を扱う

教育

研究

社会貢献

復興

【全学共通教育】

【全学部の専門教育】

【地域企業・自治体等への
インターンシップ促進】

【学生発案
独創的プロジェクトを
支援】

教育

研究

社会貢献

復興

【学生発案の独創的プロジェクトを支援】

- 地域活性化等をテーマとした学生発案のプロジェクトを支援
(地域フリーペーパー発刊、商店街・観光地活性化等)

【地域企業・自治体等へのインターンシップ促進】

- 地域企業・自治体等と協力し、インターンシップ拡充

教育

研究

社会貢献

復興

【 地域課題解決型研究支援 】

サテライト

エクステンション
センター

➤ ものづくり拠点：

花巻サテライト
北上サテライト
奥州サテライト

➤ 三陸復興支援拠点：

釜石サテライト
久慈エクステンションセンター
宮古エクステンションセンター
大船渡エクステンションセンター

03 岩手県

岩手大学

久慈エクステンション
センター

宮古エクステンション
センター

花巻サテライト

釜石サテライト

北上サテライト

奥州サテライト

大船渡エクステンション
センター

教育

研究

社会貢献

復興

【 地 域 課 題 解 決 型 研 究 支 援 】

- 岩手大教員による地域課題研究を支援
- 地域企業との課題解決型共同研究を支援
(学生も共同研究へ参画)

(研究テーマ例)

農業生産性向上、食品機能性、地域コミュニティ、まちづくり
ものづくり、循環型社会形成、自動車関連、福祉工学等

教育

研究

社会貢献

復興

【地域連携のキーマン＝「共同研究員」の育成】

- 21名のOB ＋ 現在6名の「共同研究員」

【子供たちを育成するイーハトーブの学校】

- 科学技術理解増進活動、エネルギー環境教育、スポーツ、芸術・文化へのふれあいを進める
- 「生命の大切さ」「人の絆の大切さ」「自然災害の理解と防災」などを学ぶ「いわて復興教育」を進める

【社会人学び直し教育の実施】

- ものづくり、農業経営、環境、防災、畜産、公衆衛生等、既存の学び直しプログラムを継続実施する他、新規プログラム（危機管理講座等）も開発

教育

研究

社会貢献

復興

【 復 興 関 連 事 業 の 実 施 】

- 全学共通教育で「復興学」「地域防災学」等を開設
- 復興支援関係の研究を支援
- ボランティアセンター機能の整備
- 地域の防災教育への協力

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

地元・地域

いわて協創人材の育成

実現へ協定

人材が地元へ定着する必要

岩手大学

「岩手の“大地”と“ひと”と共に」

教育

研究

社会貢献

復興

- ☐ 岩手県発展に貢献する大学
- ☐ 地域再生の核となる大学
- ☐ 社会の知的基盤としての役割を果たす大学

Center of Community

いわて協創人材の育成 県内就職率向上 地域課題の解決
岩手の産業の振興・高度化・グローバル化 岩手の文化・教育の向上

被災地学修

【 目 的 】

「地域を知る、いわてを知る」をテーマに、岩手の歴史・文化・特色を理解するため、地域に出かけていき、その地域の現状・課題について学修する。

「いわてを知る」うえで、東日本大震災は、避けては通れない現実であることから、被災地へ出向き、地元の方の話を聴くことで、岩手県への理解を深めると同時に、

「岩手県の復興に自らが何をすべきか。何が出来るか。」を深く考えるきっかけづくりとする。

また、「大学の学び」の動機づけとなることを期待する。

被災地学修

【 対 象 】

- ✓ 初年次学生 全員（1，152名）

【 実 施 方 法 】

- ✓ 初年次、基礎ゼミナールで実施
- ✓ 各学部で、グループで行動
(学科単位 または ゼミ単位)
- ✓ 原則、バスで日帰り

【 実 績 】

- ✓ 5月31日現在、7グループ、435名が参加

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年4月26日
- ✓ 学修場所：大槌町
- ✓ 農学部共生環境課程62名
- ✓ 講師：一般社団法人おらが大槌夢広場



全員で黙とうを捧げたあと、旧大槌町役場前での説明が始まる。想像を絶する講師の方の体験に聞き入る。旧大槌町役場は、解体工事の準備が始まっている。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年4月27日
- ✓ 学修場所：洋野町
- ✓ 農学部農学生命課程62名
- ✓ 講師：一般社団法人 岩手県漁業協会



漁業協会の前。ウニ、アワビの稚貝の入った水槽が、整然と並ぶ。1つの水槽の重さは、600Kgから800Kg。この水槽が津波によってすべて流された。現場にたつと、改めて、津波の威力を感じる。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月10日
- ✓ 学修場所：陸前高田市
- ✓ 工学部社会環境工学科67名
- ✓ 講師：岩手県職員のみなさま
陸前高田市職員のみなさま



陸前高田地区海岸にて、松原の浸食防止を目的とする第一線堤、数十年から百数十年に1度の津波を想定した第二線堤の工事現場についてご説明いただく。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月10日
- ✓ 学修場所：陸前高田市
- ✓ 工学部社会環境工学科67名
- ✓ 講師：岩手県職員のみなさま
陸前高田市職員のみなさま



陸前高田市今泉地区にて、ベルトコンベヤ、仮設吊り橋を見学しながらかさ上げ工事、高台移転および市街地の整備などまちづくり計画についてご説明いただく。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月17日
- ✓ 学修場所：宮古市
- ✓ 工学部電気電子・情報システム工学科127名
- ✓ 講師：宮古市職員のみなさま



宮古市危機管理課 職員の方の講義。実際に津波を経験した迫力のあるお話。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月17日
- ✓ 学修場所：田野畑村
- ✓ 農学部動物科学課程34名
- ✓ 講師：田野畑村教育委員会



田野畑村 田野畑村女性・若者活動促進センターにて講義の様子。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月17日
- ✓ 学修場所：田野畑村
- ✓ 農学部動物科学課程34名
- ✓ 講師：田野畑村山地酪農牛乳（株）



田野畑村 山地酪農を営む現場。牛が通年放牧されている牧野。緑がきれい。

被災地学修の記録

- ✓ 実施日：平成26年5月24日
- ✓ 学修場所：山田町
- ✓ 教育学部20名
- ✓ 講師：新生やまだ商店街協同組合



山田町役場前。震災時の写真と、今の町並みを比べながら、説明に聞き入る。

被災地学修の記録

【参加した学生の声（レスポンスカードより）】

✓ （前略）

昨日までの私は、甘い考えでした。どこか他人事のように思っていました。私が知ろうとしなかっただけで、現地の方々は毎日様々な決断や選択を迫られながら多くの課題と向き合っていると思います。大槌の課題のほんの一部を自分事として考えたことで、復興の難しさを知るとともに私にできることがあるのならば、力になりたいと心の底から思いました。

✓ （前略）

最後におっしゃっていた防災教育ということは私たちが伝えていたり、教育の方法を考えていく必要があると思います。今回だけではなく継続していくためにも、これから岩手や日本を背負う世代として、意識していきたいです。そのために、大学でたくさん学び、考えることを大切にしていきます。

被災地学修の記録

【参加した学生の声（レスポンスカードより）】

✓ （前略）

思い出したくないことも数多くあると思うけれども、それを話して下さったことに感謝したい。災害時に重要なことは、まず自ら行動を起こし命を守る努力をしなければいけないと感じた。また被災し大きな被害が出た場合にもそこであきらめず前に進むことが必要だと思った。実際、前に進もうと思えるまでには多くの苦悩があるのだろうと思うが、それを乗り越えられる力を持ちたい。（後略）

✓ （前略）

この他にも復興とは少し関係がないのだが、ウニの養殖に主成分が大豆の配合飼料を用いていると聞いてこれまで水産業と農業を関連づけて考えることがなかったが、この機会に気づかされた。

被災地学修の記録

【参加した学生の声（レスポンスカードより）】

✓ （前略）

本当の声を聞くことができたという経験はとてとてもとても貴重でありがたいことでした。いままで「復興」という言葉だけ見ていた私ですが、その中身についてしっかり考えていこうというきっかけをくれた日になりました。

（後略）

✓ （前略）

これらの話し合いは実際に行われたものだったのかなと思い、改めて行政の難しさをかいまみたような気がしました。私のいた6人の班ですらそれぞれの意見があり、一致することはなく結局リーダーの独断に近いものとなってしまうました。それを町民のみなさんに納得してもらうこと、そして協力してもらうことはさらに大変だったんだらうと思いました。

（後略）

被災地学修の記録

【参加した学生の声（レスポンスカードより）】

✓ （前略）

反面、復興が進んでいてうらやましいと思った。私の出身は福島であるが、地元はそんなに被害をうけなかった。しかし、原発事故が収束していない。少しだけ悲観的になってしまった。

✓ （前略）

正直、今までボランティアなんてやりたいと思ったことはありませんでしたが、ボランティアをすることで、お金ではない報酬が得られるのではないかと思います、やってもいいかなという気持ちになりました。

✓ （前略）

3年前の震災の被害を教訓にして、前向きに復興のプロジェクトに取り組む人たちは素晴らしいと思いました。自分もほんの少しでも復興に協力することができたらいいなと思いました。

被災地学修の記録

【参加した学生の声（レスポンスカードより）】

✓ （前略）

もし、施設や地域復旧などのボランティアに参加することがあれば、自分から積極的に動いていきたいと思った。一方で、学科での勉強、研究を通して、復旧の助けが出来れば、と思った。将来、岩手に残るかはわからないが、何かしらの方向でそこに加わりたい。

✓ （前略）

大学に入学するまではずっと宮古に住んでいたもので、宮古が少しずつ復興している姿は知っています。ですが、さらに復興させようという宮古市の人たちの頑張りを聞いて、将来は自分も復興の役に立ちたいと思いました。
（中略）夏休みは地元宮古に帰ってきて、ボランティアをしたいです。

地域と創る “いわて協創人材育成＋地元定着” プロジェクト

